

早稲田大学「拾葉和歌集序」
図書館蔵
—— 解題と翻刻 ——

兼 築 信 行

一 解題

鎌倉中期に成立した、『拾葉和歌集』と称呼される散逸私撰集については、伝存の資料間にいくつかの矛盾点が浮かび上がり、後考を俟つべき課題も多い⁽¹⁾。その基本資料としては、まず『拾葉和歌集序』が存在する。同序は、『異本扶桑拾葉集』や『八洲文藻』に収められるが、平成七年三月二日から四日にかけて、東京美術倶楽部四階ホールにて開催された、A B A J（日本古書籍商協会）創立三十周年記念「日本の古書・世界の古書」展において、八木書店から出品された『拾葉和歌集序』一卷はその最古写本であった。同展の目録（百七十九頁）には、巻頭の二十八行分の写真を掲載、「天地25種、色変り紙6枚継ぎ。近世初期写。布表紙。函入」と書誌を記して、

「拾葉集」の書名は「冷泉家蔵書草子目録」に見えるのみ。「序」も「扶桑拾葉集異本」や「八洲文藻」に収められているだけ。写本としてはこれが現存唯一の稀本。

との解説が付されている。本巻はその後、早稲田大学中央図書館により、特別資料として收藏されるところとなった（以下「早大本」と略称する）。いま、その書誌を記すと次の通りである。

縦三十三・〇種、横七・七種、深七・〇種の新調した印籠蓋造の素桐箱に収める。箱書等一切なし。添付の極札等も一切

ない。卷子本一軸。軸頭は印可の象牙。卷緒はない。表紙は縦二十四・九種、横十九・二種の銀紗で、白茶地に木賊色の横縞を配し、中央には横一条に木賊色と黄土色の小菱および菱枠に卍字を並べた帯を織り出す。見返しは斐紙で、金銀切箔を散らす。料紙は斐紙の染紙、縦寸法は表紙に同じで、墨付は六枚、さらに卷末に一枚を継いで軸に巻きつけてある。第一紙は横三十四・六種、水縹色紙、本文十一行。第二紙は横三十六・七種、白色紙、本文十四行。第三紙は横三十六・二種、支子色紙、本文十六行。第四紙は横三十六・四種、白色紙(第二紙よりはやくすんだ色合い)、本文十七・五行(最末一行は第五紙との継目上に書かれている)。第五紙は横三十六・二種、白茶色紙、本文十五・五行。第六紙は横三十三・八種、淡鼠色紙、本文八行。第七紙は軸際までの横寸法三十一・六種、第五紙と同じ白茶色紙。以上全巻の全長は二百四十三・一種(継目の糊代分〇・二―〇・六種があるので、料紙横寸法の総和より短くなる)、本文八十二行。巻頭第一紙本文初行の袖下方と、卷末第六紙本文末行の奥下方に「小川壽／一藏書」の単郭長方形朱陽印を捺し、巻頭袖裏下方に「早稲田／文庫」の単郭長方形朱陽印を捺した紙を貼付する。なお、外題・内題・奥書はない。図書番号は特別へ四―八〇六五。

ところで、昭和十二年二月号の『文学』誌上において紹介・翻刻された、小川寿一所蔵の「しきしまの巻」なる『拾葉和歌集序』卷子本があった(以下「小川本」と略称する)。早大本は、藏書印記により、小川寿一の旧藏本であることが明白である。すると、小川本と早大本とは、どのような関係になるのだろうか。

小川本の書誌に関しては、次のように記載されている。

家蔵に「九条殿忠栄古筆丁仲究」と箱蓋に記されてゐる桐箱があつて、中に卷子一卷と、「九条殿忠栄古筆丁仲究」と表面に

書かれてゐる紙包とがある。この紙包の中には「極外題」といふ紙包が入つてをり、その中には「九条殿忠栄しきしまの巻」とある所謂極札がある。而して卷子は、縦八寸二分で、長さ一尺二寸の厚い五色斐紙六枚から成つてゐて、巻口標面は古遠州裂、その裏見返しは金砂子である。全巻八十二行で、頗る能書である。巻初が「しきしまの云々」とあるから、

箱書及び極札に「しきしまの巻」と記したものであらう。九条殿忠榮はこの巻の書写者であつて、撰者ではない。

いま両本を比較すると、箱は異なつており、小川本に添えられた極札を早大本は有していない。しかし、その他の寸法や装丁は一致するものと断じて過たないであらう。また、『文学』誌上には、小川本の巻頭十三行、巻末十三行半ほどの写真が掲載されているが、これを早大本と比べてみても、用字・改行・紙継ぎ箇所等完全に一致しており、筆跡についても、『文学』の印影にはやや不鮮明な点が残るものの、同一の手であるとはまず認められる。すなわち、早大本は小川本そのものに他ならないと結論できるのである。

早大本II小川本は、『拾葉和歌集序』の現存最古写本であるが、資料価値としては、巻頭に端作・作者名等は一切もたない点1がもつとも重要である。『異本扶桑拾葉集』や『八洲文藻』所収本文は、冒頭に「拾葉和歌集序」と記し、下方に「藤原重範」と作者名を記している。本序の作者を「藤原重範」とするものには、はやく延宝三年（一六七五）の識語をもつ『増補本朝書籍記』がある。2これらは、序本文中の「重範」を南家藤原氏貞嗣流、『唐鏡』の作者茂範の子、従四位下大学頭重範と断定した結果であらう。『異本扶桑拾葉集』や『八洲文藻』では、叢書収録のために、冒頭に題名・作者を表示する統一的处理が施されている。繰り返すが、早大本II小川本には本序の作者が藤原重範である徴証は見当たらず、序本文を虚心に読むかぎり、弘安十年（一二八七）九月尽日（二十九日）付の本序を起草した人物は、仁和寺の僧「重範」と考えるのが自然である。それは『閑月和歌集』に二首入集する「重範法師」であつたと稿者は推定しているのだが、考証の詳細は別稿に譲ることとしたい。

注（一）兼築信行「『拾葉和歌集』について」（和歌文学会第41回大会発表 平成7年10月22日 於熊本大学文学部）。

（二）井上宗雄ほか「扶桑拾葉集伝本書目」（立教大学日本文学12 昭和39年6月）、神津真佐子「扶桑拾葉集の異本について―附 扶桑拾葉集諸本対照表―」（古典と民俗14 昭和57年10月）、同「扶桑拾葉集の続集―附 扶桑拾葉集続篇諸本対照表―」（同15 昭和58年1月）、同「扶桑拾葉集の周辺」（同16 昭和60年12月）、中世歌合研究会編

『中世歌合伝本書目』（平成3年6月 明治書院）参照。

(3) 小川寿一「拾葉和歌集序に就いて」。

(4) 注3の小川論文に所掲。

二 翻刻

【凡例】

- 一、早大本を忠実に翻字した。改行も底本のとおりとした。
 - 一、漢字・仮名は通行の字体に改めるを原則としたが、漢字には底本の旧字体を残したものがあつた。オドリ字は底本のままとした。
- 一、紙継ぎは「で示し、その下の括弧内に第何紙であるかを記した。ただし、第四紙の最末行「三十一字…」は、第五紙との紙継ぎの上に書写されているが、便宜的にこの行までを第四紙と表示した。

【翻字】

しきしまの國つわさあまつ神
よのはしめをき、やまとこと葉の
かせのすかた豊葦原のむかしのため
しを見るにこゝろの水のふかき
あさきをくみて人のなさけの
かしこきをろかなるをわくなるへし
かの古今集のあきらけきみこと
よりいま續拾遺のあらたなる
ゑらひにいたるまでいつみの柚木

たかきもくたれるもすてられずしき
のはをとのかきつくせるのみにあらず」(第一紙)
家々にあつめところ／＼にしるして
露のことはを野原の草にと、め
たえぬあとをいそへの千鳥にあら
そふといへとも雙鬢の童郎に
いたりてはきのまろとの、名をあらはす
ことなかりければ雲まの鷹のかす
すくなくそみえけるいたつらに
よそのうらみを残すに、たれとも

なをきりのへたてにまよひやすし

小子のわさ田をうちかへしおもふに

文殊のみかほをあひ見ても童子の

みなのよしあることをしり明王のたへ

なるちかひにも行者につかふる

あはれみをおもふみたのみに、は」(第二紙)

天の童子雪をめぐらして玉のみきりを

かさりよもきのしまには仙宮の童男み

れともあかぬみやひをましふかの黄

童は日のもとにならひなきほまれをほと

こし陳王はな、のあゆみに六義の

ことはをあらはせりみなこれ竹馬の

ひとふしよりいて、桑まゆのいとけなき

をわする、ことなし童子のしわさまこ

との道にかよふたねしあらはふた

葉の松のみとりのいろをすつへからす

幼稚をはけましてのりの玉のを、つか

しめはひなとりのはつねをもらさ、る

へしこ、にかしこきわか寺に柿本のかせ

をとたえす山邊のつゆいろあさやか

なるためしよ、にきこゆる中に

喜多院の二品大王の御代のりのま」(第三紙)

つりこと夏野の草よりもしけく

竹の菌のことくさ秋の露よりも

ひまなしといへともよろつのことわざ

をすてさせたまはさりけるあまり五十

首の哥をよませさせ給てなかき世にそ

つたはれりけるかの御時に金剛となん

いひける児童花のかほはせ南國をあ

さけり露のなさけ子房にもすくれ

たり糸竹のすさみてにしたかひ筆

硯のたしなみめをよろこはしめければ

みな人神童の思をなせりける中に

あやしくこの道にふけりてゑならぬ

つたへをまなへりかきなかつ水くきは

見る人のなみたの海となりあとに

くちせぬもしほくさは玉のありかまで

そしたはれけるこゝに重範むなしく

いそちあまりの春秋を、くりてなを

三十一字のよしあしにまよひながら」(第四紙)

いにしへをこふるあまりふるきなこり

をのこさむかためにことに児童の

ことのはをあつむることほうなひこか

はらの冬のしくれきためなき世の

ならひをしめしくろかみ山のゆふ

へのしもむすふちきりにこゝろを

と、めすして砂をあつめしたはふれ

さなから一佛乗のみきはにさそはれ

花になつさふこてうのあそひ色香に

そむおもひをひるかへして手なれの

小車うき世にめくるとなくかさし

はなのちるわかれなきさとりをひら

かむかために千葉のはちすによせて

ちゝの哥をあつめ十地のみやこを

ちきりて拾葉和歌集となつく」(第五紙)

をのつからすゑ野の尾花心を

なひかす人もあらは露のあさけり

をまねくことなくしてこの集を

松のとほそにかくろへて草のいほり

のつれくをわすれよとなりときに

弘安十のとしなか月くれはつる

日この葉ちる風のまきれにしるし

をはりぬといふことしかり

(以下余白) (第六紙)

(かねちく) のぶゆき 文学部専任講師